

のちんじ、昔より國々の大地震にくらぶれば、山も崩れず、川も溢れず、さのみの事にはあらねども、○中人數の多きことはかりしられず、繁花の地のならひにて、家々の造作は花やかを先とし、火災の防ぎ專一なれば、土藏瓦屋のみ多し、ア、入船の順風は出船の逆風にて、出火の時は利有といへども、地震には聊益なく、たま／＼板茨萱屋には無難あれども、土藏瓦屋の分は過半壞れ倒れ、又はかたぶき、家財器物をみちんに碎く、其音數千の雷の一度に落くる如くにて、すさまじなど云ばかりなし、貴賤上下老若男女打まぢり、あはてふためき迷惑ふうち、數ヶ所より出火して、炎天をこがし、地震の火氣もくは、りて白晝の如し、其混雜譬へるに物なし、上を下へとかへす故、人は人に踏倒され、壞れかゝる棟や宇に打ひしがれ、あるひは烟りにとりまかれ、死亡するもの數しれず、君臣も離散し、親兄弟を見失ひ、妻子に別れ、存亡いかにと呼かはし、泣きけぶ聲のみか、火に攻られてくるしむ聲四方にみちて、喧く、修羅の陌を眼の前に見るより、哀の有様なり、かゝる非常の大變、其前表なきにしもあらず、今年は冷氣いやます比ひに、殊の外あたゝかにして、梅桃大かた返り咲、九月下旬空低く、星大きく顯れ、又は所々に水涌出、其外怪敷事ども多し、心有人々は只事ならずと眉をひそめ歎息せしが、はたして此凶事あり、櫻は實を結ぶこと輕き故、二度咲もまゝ有べし、桃李は秋近く迄實を保つものなれば、桃の返り咲はあやしむべきの一つなり、天地開闢以來の大地震は、白鳳年中、土佐半國滅じ、伊豆島裂けて八島となりしときは、十一月といへども、暑中の如く、火氣履もの、裏をとふし、桃李花ひらくとあり、近くは文政十一子年霜月、越後の地震には、田の水川の水あたゝかにして、小魚悉く浮みいづる、同十三寅年七月、京都の地震は別てあつく、煮湯の中に座する如し、弘化四年、信州越後の地震にも、火氣ありて甚あつし、さあれば季候に應せず、あたゝかにして、諸木二度咲、空低く、星大きく顯れ、井の水、江の水、俄に溢れ、或は涸れ、所々に水涌出る杯は皆大地震の前表と心得、油斷なく用心すべし、諸侯大夫の歴